

報告

文化講演会

『源氏物語の魅力』

なぜたくさんの人々に

愛されてきたのか

松村武夫教授を

お迎えして

平成17年2月5日(土)午後2時より田無公民館視聴覚室で西東京市図書館主催による文化講演会が開催されました。武蔵野大学文学部教授の松村武夫氏を講師に迎え「源氏物語の魅力」について語っていただきました。60名余りの参加者があり、熱気と笑い声に満ちた講演会となりました。以下、講演会の要旨を簡単に紹介します。

日本の岩波文庫のように定評のある、モダンライブラリというペーパーバックスの編集部では、世界の最も優れた小説として『神曲』や『レ・ミゼラブル』など他の十作品と共に『源氏物語』をあげている。

アーサー・ウェイリーは一九二五年から一九三三年にかけて『源氏物語』を原文から英語に訳している。与謝野晶子の現代語訳は一九二二年に刊行されており、日本人大衆が『源氏物語』を読み始めて十年余りのちには、外国でも読まれているのがわかる。現在では『源氏物語』は各言語に訳され、世界中の人に楽しまれ、研究



松村武夫氏

されている。平安朝時代の貴族社会という非常に狭い世界の話ではあるが、時代や文化・国境を越えた普遍的なものを持ち、世界中の人に読まれている。読み方として、狭い世界に入るのではなく、広く文学として楽しむことが大切である。

『源氏物語』の構成については、現在では光源氏が栄華の絶頂をきわめる前半生を第一部、後半生を第二部、光源氏の子どもの時代の時代を第三部としている。

『源氏物語』は中国や日本の古典を物語の中にうまく取り入れている。古典を読み込んでいる人にとっては、どの部分がどの作品からとられたのかを探るのも魅力のひとつとなっている。例をひとつあげると、玉鬘十帖は『竹取物語』をふまえているが、かぐや姫が月に帰る、という結末に比し、玉鬘の姫は読者の予想を裏切り、平安時代の美意識から

最も遠い男と結ばれる。

「生田川伝説」は、二人の男性に求められた娘が選びかねて死を選ぶというパターンの話であり、万葉集や大和物語、中世では能の求塚、森鴎外の『生田川』などさまざまな文学作品に出てくる。宇治十帖の浮舟の話もまた、この「生田川伝説」のパターンを生かしている。

浮舟の話は三角関係の物語とも読め、通俗小説的な楽しみ方もできるが、浮舟の身分が低かったためにおきた物語でもある。浮舟は母の身分が低かったため皇族である父八宮にも認知されず、薫や匂宮から見ても同等ではなかった。平安朝の貴族社会の人間関係の中では自分の立つ瀬はないと浮舟は思い定め、俗世との関係を断ち切る。このように、『源氏物語』は平安朝の人間関係を

反映した小説ともなっている。はじめは「物語」だが、最後は人間の生き方を示唆する「小説」となっている。いろいろな読み方を楽しめるのが『源氏物語』である。



報告

絵本と子育て事業文化講演会 『かわねっかわねっどんねこと?』

石橋シツ子氏をお迎えして

「絵本と子育て事業」は、平成15年6月より始まった子育て支援事業です。三・四ヶ月乳児検診実施会場で、赤ちゃんと保護者を対象に、絵本を通して親子がふれあうことの大切さをお伝えするために、絵本の紹介や読み聞かせをしています。その集大成として、年一回の講演会を行っ

ています。今年度は、2月19日(土)午前10時より谷戸公民館視聴覚室で開催されました。

石橋シツ子氏は、幼稚園、保育園在職歴四十年で、現在、市内で幼児施設「たんぼ幼児クラブ」を運営しています。「子どもを自然体で育てること」が教育方針です。

開園以来、子どもたちが地域の図書館で本を借りることが、教育の中に組み込まれており、図書館でも園児たちに絵本の読み聞かせを行うなど、三十年近い図書館との関わりがあります。

以下抜粋ながら講演の内容をご紹介します。



石橋シズ子氏

頑張りすぎないことが大切
です。

(中略)

園にはたんぼぼ文庫というコーナーがあり、いろいろな種類の本があります。親がいい顔をする本もあれば、嫌な顔をする本

今、子どもを叱ることは悪いという風潮があり、叱れないお母さんが増えています。しかし、叱ることは悪いことではありません。子どもと正面から向き合うことによって、お母さんの想いが伝わり、それが子どもの生き方の道しるべとなるのです。逆に、褒めるだけのしつけもいいことではありません。褒められてばかりで育った子どもは、褒められないと不安になり、失敗すると挫折してしまいがちになるからです。

また、虐待するかもしれないという不安を持つお母さんも増えていきます。子どもとふたりだけの世界に閉じこもってしまい、自分を追い詰めてしまう。そうならないためにも、無理をしない子育てを心がけること、いいお母さんでなきゃいけないと

もありません。でもそれでいいと思っ
ています。その雑多な本の中から園
児が自分に合う本を選んだり、見極
める力を学んでいくのです。
また、手作り絵本を作ってみるの
も、絵本を身近にするひとつの方法
です。絵本という道具(おもちゃ)を
使って、親子のふれあいを楽しんで
ください。

子育ての先輩たちの体験談や本の読み聞かせを交えて、和気あいの会となりました。子育て奮闘中のお母さんの感想をいくつかご紹介します。

「がんばらなくてもよかったんだと気が楽になりました」

「模範的な子育てをしなればと力が入りすぎていた自分に気づかされ、少し肩の力が抜けました」

「絵本を読んでくださった時ワクワクしながら聞きました。子どもも私の読み聞かせをワクワクして聞いてくれるんだなと思い、うれしく思いました」

参加した方の「もつともつと絵本を読んであげたいと思いました」という言葉に図書館も応えていきたいと改めて思った講演会でした。

報 告
「ハンディキャップサービス利用者交流会」
開催

雪の残る3月6日(日)の午後、ハンディキャップサービスをご利用いただいている、主に視覚障害をお持ちの利用者13名をお招きして、図書館の音訳者34名の方々と職員との第二回交流会を行いました。

広報テープや録音図書、対面朗読などのサービスについて、日ごろ感じておられることや、忌憚のないご意見をグループ単位でお聞きし、それぞれの内容を報告しあい、最後に全員で参



加できる簡単なゲームを楽しみました。

「広報テープの途中で読み手が突然交代すると耳がついていけない」「前後後に読み手の名前が録音されていると声と名前を覚えやすい」「本屋での立ち読み感覚で、新刊紹介の記事を対面朗読時に聴けるとうれしい」「CDの点字目録がほしい」「広報テープをデイジー図書に変換して聴きたい」「軽装で来られる時期に交流会を開催してほしい」などなど、お一人おひとりから、具体的な要望をお聞かせいただきました。日ごろのテープの郵送貸出のやりとりだけではなかなか把握できないことで、利用者の方々や直接ふれあえる交流会の意義を感じました。

沖縄や伊豆でダイビングを楽しめる方や週に一回は音の出る卓球を楽しまれる

方もおられ、その様子を聞いて、私たちが元気づけられる一幕もありました。

まだ二回目ですが、さらに回を重ねながら、ハンディキャップサービスの充実に努めていきたいと考えます。